

背割羽織について

木曾山かね* 藤本 やす** 見藤 妙子***

(昭和60年9月30日受理)

A Study on the Sewari Baori —History, Design and Construction—

Kane KISOYAMA, Yasu FUJIMOTO and Taeko MITO

(Received September 30, 1985)

はじめに

ここで研究の対象として取り上げる背割羽織は、本学生活資料館に所蔵されているもので、本学二代校長渡辺滋が昭和10年当時収集したものである。

背割羽織6点のうち3点は火事装束用のもので、そのうち裏付が1点、単衣が2点である。他の3点は、越前敦賀酒井藩御用飛脚用のものと、三葉葵の五つ紋の袷と単衣の計6点である。

武家羽織として用いられた背割羽織が、火事羽織、飛脚羽織としてどのように推移したか、またそれらの装飾技法及びデザインと構成技法について考察したので、ここに報告する。

研究の方法

表題に示したように次の研究、調査、観察を行った。

1. 背割羽織について史的考察を行った。
2. デザインと装飾技法については、実物の調査を行った。
3. デザイン及び構成技法については、採寸と観察を行った。
4. 縫製方法については、観察記録し比較した。

背割羽織の史的概要

背割羽織は背を羽織丈の約半分まで縫い、下部を縫わないで明けている羽織である。普通の羽織と異なり両脇に襷が入っていないのが特徴である。これを打裂羽織

(ぶっさきばおり)といい、武士のみが乗馬に、旅行に、狩猟などに主として着用した。大身の武士も、これを潜行に用いたところから武家羽織ともいう。

武家羽織は必ず総裏とし、半裏は用いないと『近世風俗志』に記され、さらに「大身も小身も何れも表は浅黄織色の木綿に、裏は海気絹を専らとする」¹⁾とある。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』に「此内両がけをにんそくにかつがせ、ともを一人つれたるさぶらひ、おくにふうの大たぶさ、もめんをかためんそめたる、小もんのぶっさきばおりをきたるが……」²⁾とあり、木綿の布地を用い小紋染をしたものが用いられていた。御家人は、夏は麻の単のぶっさき羽織と定められている。

太宰春台の『独語』に「今の武士こはばりたる衣服を着て道をゆくでんたいに臀腿ひじんを露はし、肩張り臂掉りていかめしくふるまふによくかなへる俗衆なり……」³⁾とあり、当時の武士が打裂羽織を着用し威嚇をして歩いている姿を、猿楽より下俗で骨稽さをおもわせると諷刺し、風俗の下れる悲しき世のありさまをなげいている。武士の礼装は長袴であり、平常は平袴着用のの継袴であった。山田桂翁の『寶暦現来集卷十一』に「野羽織 俗云ぶっさき羽織これは遠足または弓馬稽古着の衣服に限りたるものなり。近頃は袴勤めの人達は御城内へ、袴羽織に、この野羽織を不構用ひける。安永比迄は決而不用 寛政度より御城内へ用ひ候に成ける」⁴⁾と、世の風俗の推移を物語っている。慶応元年毛利大膳父子御進発に付、道中着服之義について、『徳川禁令考』に「衣服の儀として陣羽織、筒袖、裁附等、如何にも輕便之品取交相用可申候 併ボタンカケ等にて洋製に紛敷品者見合候様可致候 尤道中者割羽織取交着用不苦候……」⁵⁾とあり、道中において、各様の衣服を着用し、輕便さをモットーとし背割羽織を

*第2被服構成研究室

**第1被服構成研究室

***第2手芸研究室

着用してもよいといい、さらに衣服着用にあたって過美に、また贅沢に流れないように注意を促している。

江戸幕府における武家法度により身分の格式と役高による格式とがあり、幕臣を大別すると御目見以上と御目見以下とに分かれている。御目見以上を旗本、御目見以下を御家人といい、中には異例もある。大岡越前守が享保5年(1720)に町火消の制を定め、寛政9年(1797)には火消人足の防火装束も定められ、この制は町火消の防火進退を指揮し、火消仲間の消口争いを取り締まるために設けられたものである。出火の際は火事場頭巾、火事羽織、野袴を着用して役目に服したのである。

この火事羽織は背割羽織であり、武家のみが着用できる。『貞丈雑記』に「火事装束と云物古はなし 火事も古よりある事なれどもまれの事也 今江戸は殊の外繁華にて人家多き故火事は一月の内に度々あり 依之火消の役人ありておのづから火を防ぐ装束出来たる也 それも始は革頭巾 革羽織を用いたりしが次第次第に結構になりて 今は羅紗にて火事装束を作る也」⁶⁾とあり、革羽織とあるは革製で背割になっていた。後には背割ではなくなり、さらに革製のものは一般人も用いたが、役人は用いてない。

万治2年(1659)大目付高木伊勢守守蔵が道中奉行を兼帯したのが始まりで、元禄11年(1698)御勘定奉行松平美濃守重良が兼帯した。その職は、諸国街道の宿場の吟味、宿場手代の扶持として天領の町村に課した高懸米の徴収、道や橋の普請修復と宿場の公事訴訟を掌った。後に道中関係は大目付と勘定奉行のみが、管轄するようになった。家康が江戸へ入府した天正18年(1590)8月に江戸宝田村、千代田村の百姓3人が駄馬人夫を率いて出迎えたので、家康は3人に道中伝馬役として任命し、継飛脚の給米として豊島郡高田村で土地を支給し、世襲とした。慶長11年(1606)に江戸城拡張の際に宝田、千代田の二村は郭外に移されて大伝馬町と南伝馬町となり、永く人夫伝馬の課役に服するようになった。大伝馬町は先の百姓馬込氏、南伝馬町は高野・小宮氏の管轄となった。後に馬込氏は四谷伝馬町を開き、高野氏は赤坂伝馬町を開いた。そこで幕府公用の交通通送一切を扱った。近世の通信については、五街道と東・西廻り海運の整備が前提となる。支配のある所、人と物資が移動する所には必ず、通信の必要性が追従する。幕府の通信としては継飛脚がある。『近世風俗志』に「飛脚屋は京坂より江戸に往来するを第一とす號て三度飛脚と云是も京坂を元

とし江戸を末とす…」⁷⁾とある。京より大坂・駿府御番衆についての飛脚が三度飛脚である。また大名飛脚がある。尾張・雲州・津山・松山・高松・川越・加賀・紀州・一橋・田安・水戸・会津・大垣・信州上田・松本・福井・仙台・松前などが知られている。御状箱は同一人足が宿継の場合もあったであろうが、独自の飛脚小屋をつくり手人を置くこともあった。尾州の七里飛脚が挙げられる。町飛脚は各地に存在していたが、その有力なものに三都の定飛脚がある。それは江戸定飛脚、京都順番、大坂三度が相仕として営まれていた。かれらは五畿内東山道南海道山陽道山陰道西国筋共諸家様御知行所御用達として町人のものばかりでなく、大名、代官などのものも取り扱っていた。この町飛脚と定飛脚とは取引はなかったように思われる。

背割羽織の縫について

火事装束羽織

1. 火事羽織Aは、蝶、つばめ、車の文様が無駄のない洗練された線ですっきりと美しい動きのある文様に形成されている。手法としては白の釜糸をかつら撚にして、図に沿って駒取り繻い、駒づめ(Couching Stitch [英])がされている。針目は2耗の間隔で細かくとめられ、糸を1本~3本の使い方で、その形の特徴を出し(例: つばめの頭、蝶の羽根等)、四図④のように1~14に至る連続の線でつばめの形が表現されているので、駒取り繻いをする場合も繻いやすく、糸留も少なく、きれいに仕上げる事が出来る。刺繻の技術上のこと迄考えてのこれらのデザインはみごとである。

2. Bは、にぶいオレンジ色の葛布の上に白の葛布(和紙が裏打されている)の三つ柏の文様が切付け(Applique [英])され、柏の葉脈が茶色の釜糸でまつい繻い、まつり繻い(Outline Stitch [英])がされ、その周囲は茶色の太い強撚糸で二重に駒取り繻い(Outline Stitch [英])がされている。まつい繻いは糸の重ね方で表現する線の太さを変化させる事が出来るので、葉脈を撚らない釜糸でまつい繻いをすることで、やわらかい光沢とともに、柏の葉を一層引き立たせている。

3. Cは、海老茶の厚地木綿に白の縮の布(和紙が裏打されている)が三贅文に切付け(Applique [英])されている。その周囲は若葉色の蛇腹(近世風俗志による)を二重に縁取りされて、配色が美しく、単純な文様を引き立たせ、背の三贅文と裾の鋭角の三角文様との調

背割羽織について



図1 飛脚用背割羽織（カタバミ紋）



図2 背割羽織着用の図 藻塩草

和はすばらしい。

御用飛脚背割羽織

1. Aは浅黄色木綿地に、^{かたばみ}酢漿草文とうさぎの文様が刺繡されている白の縮の布（和紙が裏打されている）が、切付け（Applique〔英〕）されている。下図より5耗大きい和紙に、図6の㊦の番号順に蛇腹を図案に沿ってのせ、仮とじをして裏（和紙側）より蛇腹の厚みの2分の1位すくい、針目が表に出ないように3耗間隔にとじつけた後、廻りの和紙に切込みを入れ、内側に折り「うさぎ」が出来上がる。それを身頃に直接のせ、廻りをとめている。

一方、「^{かたばみ}酢漿草文」の方は「うさぎ」と同様の縫い方であるが、身頃にとじつける際、身頃の裏側に厚目の和紙が貼られ、和紙側より図案通り3耗の針目でしっかり形よく蛇腹がとじつけられているのは、技の巧みな職人の仕事と思われる。

2. B, Cは、黒茶、黒の木綿地に三つ葵の五つ紋が



図3 背割羽織の刺繡の一部分

かかれています。丸く白く残された地に、三つ葵の文様が髪の毛一本の細さで精巧に美しく、三つとも揃ってかかれていますのは、筆の巧さとともに精神統一しての心をこめての仕事であろう。

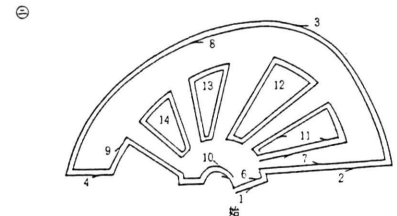
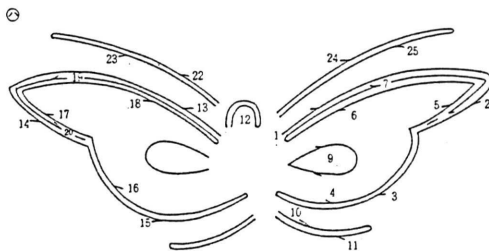
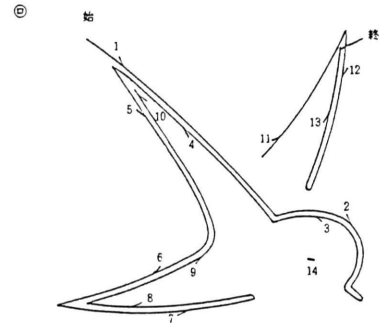
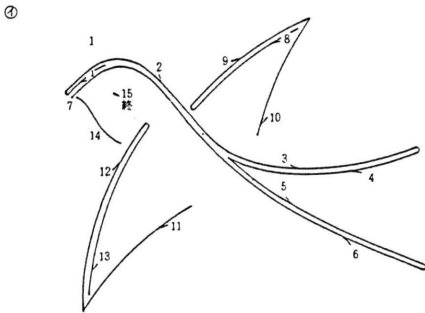


図4 火事装束羽織の文様

構成とデザイン

背割羽織の素材・色・紋・特色

背割羽織6点の素材・色・紋・特色について、分類し、表に示した。(図7及び表1参照)

背割羽織の寸法・形態上の諸点

表2によって形態上の諸点を考察すると次の通りである。

袖幅……31.5cmから34cm, 袖丈……49cmから54cm

袖口……26.5cmから32cm

背丈……85cmから97cm 火事羽織, 飛脚用ということで丈に違いはみられない。

前下がり……3cmから7cm 火事羽織Cが特に多い。

衿幅……飛脚用の羽織は衿幅が狭い。

背明寸法……ここがこの羽織の名称の所以であるが、43.5cm, 56.8cmである。

衿肩明……10cmから13.5cm

飛脚用羽織と火事羽織の相違点について、よく観察調査したが、衿幅位で他は、着用者の体格に合わせて寸法

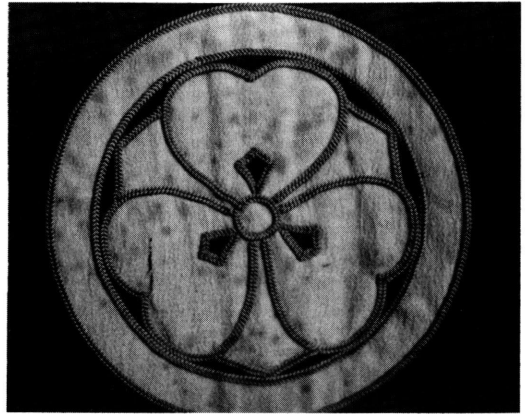


図5 背割羽織の刺繍の「酔漿草文」

を加減しているようである。

図8は、衿幅、衿肩明他すべて寸法が大きい。

火事羽織Cと、ごく普通の寸法の飛脚羽織のCを示したが、図でも理解されるように現代の羽織のように襷がないことが、これらの特色の一つである。

紐が陣羽織風のもの、現代の羽織の乳の形態のものがある。

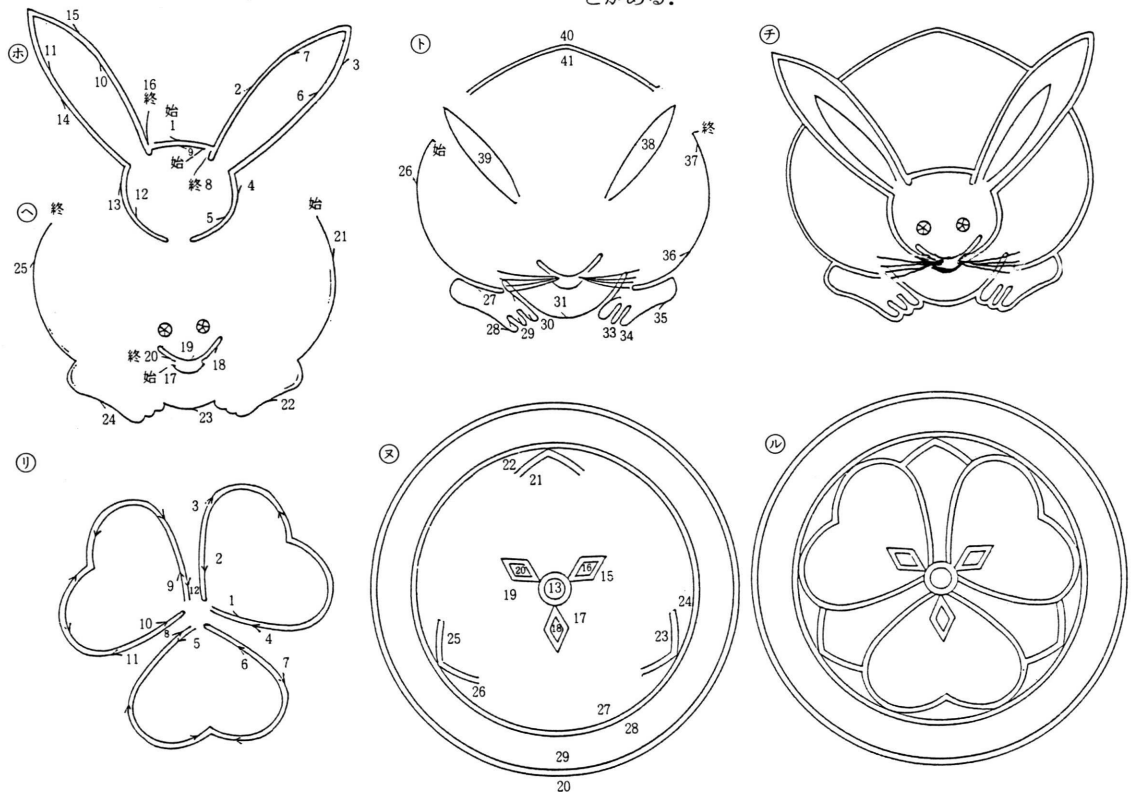


図6 飛脚羽織の文様及び紋

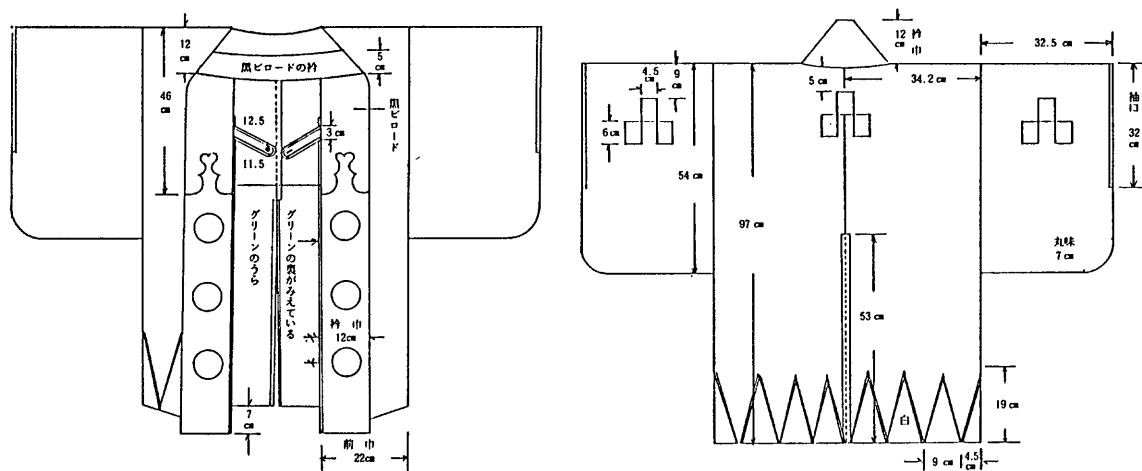


図7 梶原家火事羽織 三縷紋(三つ紋)

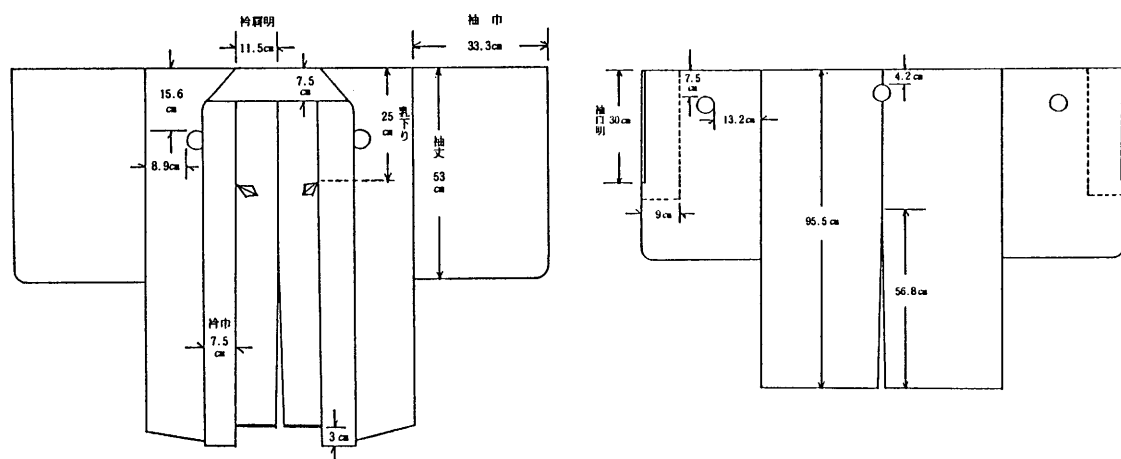


図8 御用飛脚用羽織 三つ葵(五つ紋)

背割羽織について

表1 背割羽織の素材・色・紋

項 目		素 材	地	色	紋	備 考
火 事 羽 織	A	三 本 紹	淡ねずみ色（スレート・ブルー）		丸 十 字	裾には美しい繻文様がある
	B	葛 布	茶（丁字色）にぶいオレンジ ふち 茶		三 つ 柏 紋	無地
	C	表…綾木綿 裏…絹平織	表 海老茶（テラローザ）赤土の色 裏 淡明黄		三 鷺 紋	裾及衿に切つかけの繻で飾られている
飛 脚 羽 織	A	木 綿	浅黄 ふち 明るい灰味の茶		カ タ バ ミ 紋	背の明止りにうさぎの文様がある
	B	麻	黒茶		三つ葵五つ紋	無地
	C	表…麻平織 裏…絹 "	黒 ダーク、グレー（暗いオリーブ味） 花色絹		三つ葵五つ紋	無地

表2 背割羽織の寸法

項 目		火 事 羽 織			飛 脚 羽 織		
名 称		A	B	C	A	B	C
袖	幅	32	34	32.5	31.5	32	33.2
袖	丈	49	52	54	51	50.6	53
袖	付	49	52	54	51	50.6	53
袖	口	26.5	29	32	29	30	30
肩	幅	32	31	34.2	30.5	30.8	32.2
背	丈	88	90	97	91	85	95.5
後	幅	32	30.5	34.2	31	30.5	30.8
前	幅	20	19.2	22	20.5	20	19.7
前	下 り	3.5	3.5	7	4	4	3
乳	下 り	27	25	25	25	28	25
衿	幅	9	10	12	9	6.7	7.5
背	明 寸 法	52	43.5	53	48	50	56.8
衿	肩 明	10	10.5	13.5	10	10	11.5
紐	巾		3	3	3		
紐	丈		12.5	12.5	10		
乳		乳			乳 乳		

表3 縫製の比較

			背 縫	背明部分	明止り	袖 口	裾	衿	紋	備 考
火 事 羽 織	A	単	片返し	玉縁仕立	門止め	玉縁 0.5cm	玉縁 0.5cm	上衿なし 乳つき	10cm大 縫かがり 3つ紋	
	B	単	割って ある	玉縁仕立	玉縁	同上	〃	上衿つき(白朱子) 紐つき	10cm大 縫かがり 3つ紋	
	C	袷	片返し	玉縁仕立	門止め	同上	〃	上衿つき (ビロード) 紐つき	10cm大 縫かがり 3つ紋	前は紐付の位置、 後は背明3cm上 まで裏がついて いる
飛 脚 羽 織	A	単	割って ある	玉縁仕立	玉縁 兔の紋	同上	〃	共衿つき 紐つき	10cm大 縫かがり 1つ紋	
	B	単	割って ある	二つ折り 耳衿け	門止め	毛抜合せ	耳衿	上衿なし 乳つき	3cm 染抜き 5つ紋	
	C	袷	片返し	毛抜合せ	門止め	毛抜合せ	裏 0.5cm ひかえる	上衿なし 乳つき	3cm 染抜き 5つ紋	裾まで裏が ついている

縫製について

表3に示すように、背割といわれる背中心の明きの部分は、火事羽織はすべて玉縁であり、飛脚羽織はAのみ玉縁であってBは裏に折って耳ぐけされており、Cは袷なので毛抜き仕立である。

袖口も裾も明きと同じ玉縁仕立である。

飛脚羽織Bは衿幅も狭く、五つ紋で縫い方も粗雑だが現在用いている羽織に最も近い。

飛脚羽織Cは袷羽織で、裾まで総裏がついており、表より0.5cmひかえている。

ま と め

観察した6枚の火事装束羽織、御用飛脚背割羽織についての考察結果を次にまとめた。

A 服飾の共通点

(1) 文様の中にある植物、花、蝶、うさぎ、つばめ等は農耕民族の日本人の心情として、やさしい、愛らしいものが好まれてデザインされたように思われる。

それらは1本の線の連続で図案が構成されていて、形が単純化され、その形の特徴がよく表現されてスッキリしている。線縫いの駒取り縫いの場合、糸を度々切るこ

となく、糸が連続していると縫い易いし、出来上がりもきれいに出来ることから、これらの文様のデザインは刺繍の技法をよく理解したすぐれた技術者が、デザインしたのではないかと考えられる。

(2) 手法は駒取り縫い (Couching Stitch [英]) を主として使用されている。直接布に刺繍されたのは火事装束Aのみで、B、Cと御用飛脚用背割羽織Aは、切付け (Applique [英]) と駒取り縫い (Couching Stitch [英]) との併用である。

(3) 技術面では針目が繊細で、技術的に難しいところも精巧に出来ていて、一本の糸使いにも神経が行届いている。下絵、配色、繻技がすぐれているところから、これらは刺繍職人が繻ったものと考えられる。

B 背割羽織の史的概要の考察

背割羽織の背の割れているのは馬上に、また刀を腰にさした時などの実用性が派生したものと思われる。

室町・桃山時代の頃にも背が割れており、袖のないものが用いられていたが、袖のついている襦袢無しの羽織形式のもの、打裂羽織が武家専属に着用されたのは江戸時代である。平穏な時代にあって、特に火事羽織は火事装束と共に材質、装飾共に華美になる傾向をもっている。

背割羽織について

折々華奢禁止令が出されて、自粛するように御触が出されている。これに反して御用飛脚羽織は、役目柄地味で質素な材質、色合で作られている。

背割羽織は鷹狩などの狩猟に出かけた折り、世話役の供人が着用していた。

本学にある三つ葉葵紋のついている御用飛脚羽織は、徳川御三家の内の葵紋である。

C デザイン・構成

- (1) 襷がない。
- (2) 家紋は時代が古いほど大きい。
- (3) 大きい家紋は、繻の技法（切付け）でつけられている。（火事羽織のA、B、C、飛脚羽織のA）
- (4) 小さい家紋は、染抜でつけられている。（飛脚羽織のB、C）

以上のことについて、本学資料館の貴重な資料の観察ならびに考察ができた。

終わるにあたり、年余に亘って本研究に協力して下さいました資料館石垣事務長、木村書記、第二被服構成研究室雲田助手に感謝する。

註

- 1) 喜田川守貞：類聚近世風俗志（原名守貞温稿）
文潮社書院 1933 p. 437
- 2) 十返舎一九：東海道中膝栗毛 日本古典文学大系
62 岩波書店 1980 p. 279

- 3) 太宰春台：独語 日本随筆大成第一期17 吉川弘
文館 1976 p. 277
- 4) 山田桂翁：寶曆現来集 近世風俗見聞集第三 図
書刊行会 1970 p. 226
- 5) 石井良助編纂：徳川禁令考前集第一 創文社
1959 p. 87
- 6) 故実叢書編集部：貞丈雑記 新訂増補故実叢書
明治図書出版株式会社 1955 p. 207
- 7) 喜田川守貞：類聚近世風俗志 文潮社書院 1933
p. 99

参考文献

- 1) 笹間良彦：江戸幕府役職集成（増補版） 雄山閣
1947
- 2) 豊田武，児玉幸吉編：交通史 山川出版社 1974
- 3) 山辺知行：日本の染織 源流社 1985
- 4) 相川佳予子他：日本の工芸「刺繻」 淡交社
1978
- 5) 能坂利雄：家紋の知識 100 新人物往来社
1977
- 6) 岡登貞治：文様の事典 東京堂出版 1971
- 7) 今井むつ子：日本の刺繻 毎日新聞社 1976
- 8) 山辺知行：日本の染織 中央公論社 1982
- 9) 守田公夫：日本の美術 No. 59 刺繻 至文堂
1971
- 10) 佐貫利夫他：刺繻 暮らしを彩る伝統美 泰流社